

## 吉園明子と佐伯贗作

### 1. 週刊誌 吉園関連記事 2009/ 3/ 9 22:36 [ No. 9429 / 9431 ]

巴里日記の編集者の話だと多額の金が匠秀夫に渡っていたとのこと。落合氏「匠は明子との間に多額の金銭関係を持ち込み」とあります。本当は明子がカネをつつんで匠に近づいたと考えるのが妥当だと考えます。明子は味方になってくれる人には大金を振りまいたのでしょう。なにしろ本物となれば大金持ちとなりますから。

今までの週刊誌で紹介されたものをあげてみましょう。

#### アエラの33ページ

明子はさまざまな人物に資料を小出しにしていた。武生市に寄贈した作品以外で、すでに複数の画商や実業家に分散して売却してしまった作品もある。

#### 落合氏 p 127

明子は山甚に佐伯作品11点などの代金を受け取ってしまった。

#### 週刊新潮

##### 「その気にさせた女性」抜粋

河北氏をその気にさせた女性とは？ 吉園さんを知る人の中には「慶応大学医学部卒」あるいは「東邦大学医学部卒」と彼女から聞いた人もいる。鎌倉で吉園さんに2億5千万円という大金を貸した人がいる。「そのころ吉園さんは天声人語を執筆している。」「彼女の生い立ちは彦根の井伊家の出身」、「実の父がもと彦根市長の井伊直愛さんだ」というのです。「障害者の福利施設を作りたいから寄付を」「ワケあって吉園家に養女にでたのだが、その井伊家と吉園家で起こった事件の後始末に大金が必要になった」と、こういうことで2億5千万円も貸してしまった。彼女の話は後で全てうそだとわかった。このことで訴えられかけたので実業家から4億円手に入れ、返済にまわしている。吉園さんを知る別の知人によると、そのころ「ギャラリーとぼ舎」という画廊を持ち、すさまじい勢いで絵を買い捲っていたという。「ギャラリーとぼ舎」を検索してみる。

個展：無明有額展（渋川市民会館ホール／群馬）

個展：ふるさと光と風展（東電渋川支店ホール／群馬）

個展：みちのく上山観音譜展（上山市上山城内／山形）

個展：古都鎌倉有韻展（ギャラリーとぼ舎/神奈川鎌倉）12/16～28

昭和62年は1987年で鎌倉でギャラリーとぼ舎は本当にあったようだ。

#### 河北氏の次男の弁

父と明子さんとのことでいろいろと、たとえば、病院の特別室への入院代は彼女もちなのではないかといった噂が立っているようですが、ちゃんと自分の通帳から出しています。父は

無防備な性格で、本物と思ったからそういったのだという感じでしたから、しょうがないですよ。遺族のくせに、冷たいようですが、父が年をとって盲になったといわれれば、それもしかたのないことだと思います。

(注) 匠さんが入院していた特別室は高額な費用がかかった。これを吉園明子がだしていた。同じ病院の特別室に河北さんが入院したため、そのよううわさが立ったのだろう。

## 週刊文春

その渦中の人物、吉園明子氏が今回小誌に口を開いた。今回の真贋騒動については？「もうわからない。でも今はもう私が作ったということになっているのですよね」。佐伯祐三贋作事件の核心を握るこのコレクションの人物は、ご本人でも真贋がわからなくなっていることをあっさり認めたのだ。「父が作ったのかもしれない、ハハハハ。今回は自信がないですね。言われっぱなしで。父から聞いたわけじゃない。父との会話で佐伯祐三さんの名前は一度も聞かされたことがないのです。残された父の遺書を見ただけなのです。贋作派のボルテージは上がるばかり。その根拠はこれまでの行状にある。経歴詐称、火災保険や生命保険の詐欺疑惑、贋作絵画の販売を数え上げるときりがないのだ。

## 2. 自由と画布

「自由と画布」は吉園明子著。彼女の父周蔵が、佐伯祐三の精神的、金銭的援助をしていたと記している。佐伯を援助したお金の出所は周蔵の父からと最初は記されている。ところが、それが無理だと悟られると感じたのか、明子は後に親戚にあたる若松家から出ていると、お金の出所は代わります。ところで、調べてみるとその経済的背景は全て武生市の調査によって否定されている。落合さんは「自由と画布」は伝聞によるものだからあてにならない。こんなもの議論の余地がないとする。しかし、この本には周蔵手記と書いてある。また診察録まで書いてある。この本は、そう簡単に否定されない。

さて落合さんに明子氏が相談に行く。落合さんが「なにか証拠になるようなものがあれば」と言うと、明子の係累の着物からなんだかんだと、周蔵の関したものがでてくる。カネの出所は佐伯をスパイとして育てるために大谷家からでている。それに加え周蔵の麻薬の栽培による莫大なお金ということになっていく。スパイ活動などというものは証拠がない。これを使えば全てごまかせる。実のところ佐伯祐三は他人の金を必要としなかったのである。「素顔の佐伯祐三、山田新一」の本の4ページ、5ページに祐正の弟に対する愛情は深く、莫大な仕送りを惜しまなかったとある。

また「山田が佐伯の死後、1年ほどして、まっすぐ光徳寺を訪れたところ、彼の母上は文字通り走りつつ転びつつ玄関の式台に来て『秀かー』と泣いた。異国に寂しく散った愛児への母上の愛惜は、一方なものでなく、その死をいつまでも信じかね、僕の不意の訪れを、秀丸の帰国と錯覚し、つい僕もほだされて、乞われるままに3泊して佐伯の霊を慰めた。」とある。

「佐伯祐三の巴里日記」や「自由と画布」では佐伯祐三・兄祐正と米子との不仲、祐三が家族に疎んじられていたことを強調している。だから、佐伯祐三は周蔵に対してお金の無心をし、周蔵との深い絆があったとする。

## 「佐伯祐三の巴里日記」

本来日記を書く場合、パリに着いた感動や、人との交流、絵を書く場所を見つけた感動、どうしてすばらしいのかなどを書くはず。ところが、この巴里日記には周蔵のことがほとんどで、贋作を真作としようとする作為が感じられる。

### 3. 明子氏の学歴

有名な人の知り合いである、自分は由緒正しい人間の血を引いている、市長の係累である。こういうことは言わなくても、書かなくてもいいはずである。人を信用させる常套手段だと思われる。週刊誌では東大医学部卒、東邦大学医学部卒と聞いた知人がいるとある。自由と画布では、自分は医学部を中退したと書いている（どこの大学とは書いていない）。落合氏の本では明子氏は東邦高校を卒業、東邦大学医学部に入学したが、入学後2ヶ月で「教授に君は医師としての繊細さが欠如している」と言われて退学したとなっている。入学2ヶ月の教養学科の時にそんなことを言う教授がいるだろうか？せめて、一学期が終わるまで、学年試験が終わるまでは暖かい眼でみまもるはずだし、他の教授も黙っていないだろう。またそれを聞いて「はい、そうですか」というような生徒、親がいるとは思えない。

### 4. 天才画家佐伯祐三真贋事件

落合氏の著書によると「自由と画布」は伝聞と随想だから、これをまじめに取り上げたほうが悪いという書き方をしている。しかしここには周蔵の日記なども入っている。「巴里日記」も無垢な女性明子氏が匠の言うままに、本にしてしまったから、これも誤解を招くとしている。つまり、上記の二つは明子氏がもっとも深く関与しているのに、あてにならないとしてしまう。

落合氏は武生市で明子氏の代理人となって動き、武生市資料（この武生市資料には、残念ながら市が途中で調査を打ち切りにせよとしたため、最後まで事実を書く事ができなかった。市長を守るため真実を暴けなかった。）が発表されまた、市が佐伯作品をかぎりなく灰色に近い黒としてこの寄贈を断ったとき、落合氏はその反論を書いている。そして書かれたのが落合氏の「天才画家佐伯祐三真贋事件の真実」。この本になって始めて、周蔵がスパイであって佐伯もスパイであったという話に変えられていく。その資料の出方も不思議また、米子の加筆の手紙がでてきた事情、このあたりがおかしい。次から次へと都合のいい資料が後から出てくる。それを落合さんが、なぜもっと早く出さなかったのかとたずねる。すると、明子氏が亡くなった、だれそれがそれはしまっておいたほうがいいとおっしゃいましたので、という文章。この本に書かれていることは、明子氏よりの伝聞と歴史的事実を結び付けているだけで、まったく証拠がない。また、つじつまがあわないところがいっぱいあるのを認めてか、「佐伯が何度も書き直すように支持した。なぜかわからないが日にちが違うようにしている。」などと、矛盾は当たり前のことになっている。

佐伯祐三や米子が国のスパイになってなにか意味があるのだろうか。佐伯の係累は周蔵の名前など聞いたことがないと言っている。また、佐伯に関する過去の全ての資料にも周蔵はでてこない。この本に書かれている「周蔵の長男、緑が死んでから佐伯作品を世に出せ」という周蔵の遺言。これはやはり佐伯を一番知る山田の死を待ち望んだ欲にからんだたくらみと見るべきだろう。

5. 落合氏の本から要点だけ搾り出す。

「私は吉園明子氏から「救命院日誌」のワープロコピーを取り寄せ、読み始めて異常な感じを受けた」とある。なぜ明子氏に原物を渡してもらわないのか。前に書いた同じ文章。

#### 武生市資料

周蔵日誌は数ページ分の写真を除いては、全て明子氏のワープロ稿でのみで提供された。市や研究者の要請にも関わらず遂に、明子氏は現物を全体として提示されようとはしなかった。それだけではない。明子氏は再三にわたり資料はもっと沢山ある、油彩画も200点近くあるといいながら、だれにも全貌を明確に示そうとはしない。ただ伝聞の情報と、出所の不確かなコピー資料、たとえば「周蔵の遺書、周蔵が昭和3年に父親に出した葉書数通、佐伯米子の昭和3年以降の手紙数通」だけが出回るといふ、最悪の事態が続いているのである。これでは厳密な学術調査など進めようがない。もし、明子氏が父・周蔵由来の作品・資料についてしかるべき判断を真に望むなら、周蔵の経歴その他に関し、正確な情報を自ら提供して裏付けをし、なおかつ吉園資料・作品の全貌をコピーでなく現物の形で明らかにする必要がある。

#### 落合氏の本「天才画家佐伯祐三真贋事件の真実」

243ページに吉園周蔵手記と題して約13辺の手帳のような紙片が写真でのせられている。上の3辺は縦書きで人が書いたものであるが、他の全てはワープロで書かれたものと見られる。これを落合氏は意識的にされたのであろうか？字が細かすぎて読めないため、どこがどういう時代に書かれたのかわからない。

#### 落合氏の本「天才画家佐伯祐三真贋事件の真実」273ページ

私は吉園明子氏から「救命院日誌」のワープロコピーを取り寄せ、読み始めて異常な感じを受けた。(中略)「周蔵手記によって救命院日誌は、佐伯祐三が自分の理想を盛り込んだ創作であり、周蔵がそれを清書したものとわかって納得した。

#### 落合氏の本230ページ

12月12日、池田チャが医療老人ホームに移ることになり、手伝いに行った明子は、その荷物の中から書状を見つけた。→「ぎんずる書簡」

#### 233ページ

私は明子に告げた。「これで輪郭はつかめた。あとは公的な書証がでてくれば、それでできあがりだが、公式記録は何も無いようですね。せめて、海外渡航記録でも出てくればいいのに、なぜ出てこないのだろうかなあ?。「そのことでお伝えしようと思っていたのですが、父は幾つか偽名を使っていたようです」。その後、間もなく「ぎんずるの手紙」は7通見つかった。チャの着物の袂から、何度かにわけてそれは出てきた。その文面でこれまで調べて事を裏付けし、肉付けしていくことができた。→ここで周蔵が草ということになる。

241 ページ～

周蔵手記が現れ、これが発見されるたびに届けられた。ここでタバコ商小山健一の名で周蔵が渡航したとなる。この名まえを落合氏は外交資料館で見つけたと書いている。

その鎌倉事件を書いてみよう

明子が鎌倉で昭和63年ごろ、人助けのため急に資金の必要があったとき、かかっていたマッサージ師が聞きつけて、融資を申し出てくれた。融資とはなかなか受けられないもの。それが相手から申し込んできたことになっている。これは常識はずれ。週刊誌に先に示したこととはまったく違う。落合氏は女性に弱いのだろうか。鎌倉署内では、カンノ刑事が威圧的な調子で「これから詐欺容疑で取り調べる」と言い始め、「早く払ってやれ」と強請したというのである。刑事が首になるかもしれない行動をとるであろうか。

落合氏に言わせると、すべて弁護士もぐるで、明子を陥れ2億3千万支払ったとなっている。それが本当ならこの弁護士も訴えても良かったのでは。吉園氏が正しいと思うなら、落合氏は関係者をなぜ訴えなかったのだろうか。詐欺で実刑を受ける人間にどうして、ここまで好意的なのであろう。